

# 第127期 中間決算公告

平成21年12月30日

岡山市北区番町2丁目3番4号  
株式会社 トマト銀行  
取締役社長 中川 隆進

中間貸借対照表（平成21年9月30日現在）

（単位：百万円）

科 目	金 額	科 目	金 額
（資産の部）		（負債の部）	
現金預け金	12,490	預渡性預金	796,351
コ－ル口座	12,000	コ－ルマネー	1,688
商品有価証券	331	借用金	2,036
有価証券	190,095	外国為替債	4,907
貸出金	627,225	その他の負債	8
外国為替資産	900	未払法人税等	5,000
その他の資産	4,472	その他の負債	6,963
有形固定資産	10,232	退職給付引当金	183
無形固定資産	682	役員退職慰労引当金	6,780
繰延税金資産	3,395	睡眠預金払戻損失引当金	615
支払承諾見返金	4,100	偶発損失引当金	113
貸倒引当金	△ 9,011	再評価に係る繰延税金負債	35
		支払承諾	341
		負債の部合計	697
			4,100
			822,862
		（純資産の部）	
		資本	14,310
		資本剰余金	12,640
		資本準備金	12,640
		利益剰余金	6,244
		利益準備金	1,773
		その他利益剰余金	4,471
		不動産圧縮積立金	189
		別途積立金	3,547
		繰越利益剰余金	733
		自己株式	△ 458
		株主資本合計	32,736
		その他有価証券評価差額金	791
		繰延ヘッジ損益	△ 0
		土地再評価差額金	526
		評価・換算差額等合計	1,317
		純資産の部合計	34,053
資産の部合計	856,916	負債及び純資産の部合計	856,916

中間損益計算書 ( 平成21年4月 1日から )  
平成21年9月30日まで

(単位：百万円)

科 目	金 額
経 常 収 益	9,587
資 金 運 用 収 益	7,911
(うち貸出金利息)	( 6,866 )
(うち有価証券利息配当金)	( 1,004 )
役 務 取 引 等 収 益	1,221
そ の 他 業 務 収 益	259
そ の 他 経 常 収 益	194
経 常 費 用	9,024
資 金 調 達 費 用	1,175
(うち預金利息)	( 1,019 )
役 務 取 引 等 費 用	733
そ の 他 業 務 費 用	17
営 業 経 費	5,946
そ の 他 経 常 費 用	1,152
経 常 利 益	562
特 別 利 益	250
特 別 損 失	38
税 引 前 中 間 純 利 益	774
法 人 税、住 民 税 及 び 事 業 税	153
法 人 税 等 調 整 額	316
法 人 税 等 合 計	470
中 間 純 利 益	303

## 注記表

記載金額は百万円未満を切り捨てて表示しております。

中間財務諸表作成のための基本となる重要な事項

1. 商品有価証券の評価基準及び評価方法
 

商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。
2. 有価証券の評価基準及び評価方法
  - (1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、子会社・子法人等株式及び関連法人等株式については移動平均法による原価法、その他有価証券のうち時価のある株式、受益証券及び出資証券は中間決算日前1カ月の市場価格等の平均価格、株式、受益証券及び出資証券以外は中間決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、時価のないものについては移動平均法による原価法又は償却原価法により行っております。
 

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
  - (2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。
3. デリバティブ取引の評価基準及び評価方法
 

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
4. 固定資産の減価償却の方法
  - (1) 有形固定資産(リース資産を除く)
 

有形固定資産は、定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))については定額法)を採用し、年間減価償却費見積額を期間により按分し計上しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 : 7年~50年  
その他 : 2年~20年
  - (2) 無形固定資産(リース資産を除く)
 

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。
  - (3) リース資産
 

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法によっております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。
5. 引当金の計上基準
  - (1) 貸倒引当金
 

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は5,566百万円であります。
  - (2) 退職給付引当金
 

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、当中間期末において発生していると認められる額を計上しております。また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は以下のとおりであります。

過去勤務債務                      その発生年度の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(14年)による定額法

- により損益処理
- 数理計算上の差異      各発生年度の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌期から損益処理
- なお、会計基準変更時差異(4,289百万円)については、14年による按分額を費用処理することとし、当中間期においては同按分額に12分の6を乗じた額を計上しております。
- (3) 役員退職慰労引当金
 

役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見積額のうち、当中間期末までに発生していると認められる額を計上しております。
  - (4) 睡眠預金払戻損失引当金
 

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。
  - (5) 偶発損失引当金
 

偶発損失引当金は、信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来の負担金支払見込額を計上しております。
  6. 外貨建資産及び負債の本邦通貨への換算基準
 

外貨建資産及び負債は、中間決算日の為替相場による円換算額を付しております。
  7. リース取引の処理方法
 

所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年4月1日前に開始する事業年度に属するものについては、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。
  8. ヘッジ会計の方法
    - (1) 金利リスク・ヘッジ
 

ヘッジ会計の方法は、「金融商品会計に関する実務指針」及び「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号。以下「業種別監査委員会報告第24号」という。)に基づき、固定金利の預金・貸出金等に係る相場変動の相殺及び変動金利の預金・貸出金等に係るキャッシュ・フローの固定化を目的に、ヘッジ対象を取引単位で識別する個別ヘッジとリスクの共通する複数取引を対象とする包括ヘッジを採用しております。これは、期初に定める市場リスク管理方針に基づいて行うリスク管理であり、繰延ヘッジ又は「金利スワップの特例処理」による会計処理を行っております。また、繰延ヘッジ会計適用にあたり、同実務指針及び同取扱いに定められている判断基準に基づいて、ヘッジの有効性を評価しております。

当中間期におけるヘッジ会計の適用は「金利スワップの特例処理」のみであります。
    - (2) 為替変動リスク・ヘッジ
 

外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号。)に規定する繰延ヘッジによっております。

ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。
  9. 消費税等の会計処理
 

消費税及び地方消費税(以下、消費税等という。)の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当中間期の費用に計上しております。

## 注記事項

(中間貸借対照表関係)

1. 関係会社の株式総額      12百万円
  2. 貸出金のうち、破綻先債権額は3,150百万円、延滞債権額は18,434百万円であります。
- なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下、「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。
- また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

3. 貸出金のうち、3カ月以上延滞債権額は130百万円であります。  
なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3カ月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

4. 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は3,342百万円であります。  
なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

5. 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は25,058百万円であります。

なお、2. から5. に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

6. 手形割引は、業種別監査委員会報告第24号に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替は売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は8,894百万円であります。

7. 担保に供している資産は次のとおりであります。

担保に供している資産

有価証券 8,123百万円  
預け金 89百万円

担保資産に対応する債務

預金 6,246百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保として、有価証券15,146百万円、預け金2百万円を差し入れております。

子会社、子法人等及び関連法人等の借入金等の担保として差し入れているものはありません。

また、その他資産のうち保証金は175百万円であります。

8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は59,663百万円であります。このうち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なものが59,408百万円あります。

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている社内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

9. 土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)、平成11年3月31日の同法律の改正に基づき、事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日 平成11年3月31日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第4号に定める地価税法第16条に規定する地価税の課税価格の計算の基礎となる土地の価額を算定するために国税庁長官が定めて公表した方法により算定した価額に基づいて、合理的な調整を行って算出しております。

10. 有形固定資産の減価償却累計額9,180百万円

11. 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金3,248百万円が含まれております。

12. 社債は、劣後特約付社債5,000百万円であります。

13. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する当社の保証債務の額は8,168百万円あります。

14. 1株当たりの純資産額 295円82銭

15. 当社の自己資本比率(単体)は9.74%であります。

(中間損益計算書関係)

1. 「その他経常費用」には、貸出金償却376百万円、貸倒引当金繰入額568百万円及び株式等償却53百万円を含んでおります。

2. 1株当たり中間純利益金額 2円63銭

3. 使用方法の変更や市場価格の著しい低下により、資産グループのうち割引前将来キャッシュ・フローの総額が帳簿価額に満たないものについては、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減

少額26百万円を減損損失として特別損失に計上しております。

岡山県外

用途 営業用店舗2か所  
種類 建物動産等  
減損損失 26百万円

資産のグルーピングの方法は、営業用店舗については管理会計上の最小区分である営業店単位で行っており、その他遊休資産等については各々独立した単位で行っております。

資産グループの回収可能価額は正味売却価額により測定しており、「不動産鑑定評価基準」(国土交通省平成14年7月3日)に準拠して評価した額から処分費用見込額を控除して算定しております。

(有価証券関係)

1. 満期保有目的の債券で時価のあるもの(平成21年9月30日現在)

	中間貸借対照表 計上額(百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
国債	20,036	20,634	598
地方債	—	—	—
社債	500	489	△ 10
その他	500	450	△ 49
うち外国債券	500	450	△ 49
合 計	21,036	21,574	538

(注) 時価は、当中間期末における市場価格等に基づいております。

2. その他有価証券で時価のあるもの(平成21年9月30日現在)

	取得原価 (百万円)	中間貸借対照表 計上額(百万円)	評価差額 (百万円)
株式	3,619	3,527	△ 91
債券	136,767	138,316	1,548
国債	88,758	89,863	1,105
地方債	9,847	9,920	73
社債	38,162	38,531	369
その他	18,368	18,241	△ 127
うち外国債券	17,928	17,783	△ 145
合 計	158,755	160,085	1,329

(注) 1. 中間貸借対照表計上額は、株式等については当中間期末前1カ月の市場価格の平均に基づいて算定された額により、また、それ以外については、当中間期末日における市場価格等に基づく時価により、それぞれ計上したものであります。

2. その他有価証券で時価のあるものうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって中間貸借対照表価額とするともに、評価差額を当中間期の損失として処理(以下「減損処理」という。)しております。

当中間期における減損処理額は、株式51百万円あります。

また、減損処理基準は以下のとおりであります。

- (1) 簿価に対して時価の下落率が50%以上の銘柄は、全て減損
- (2) 下落率が30%以上50%未満の銘柄については、過去の株価動向、発行会社の業績・信用リスクの推移等を検討し、回復する可能性がないと判断されるものは、全て減損

(追加情報)

変動利付国債の時価については、従来、市場価格をもって中間貸借対照表計上額としておりましたが、昨今の市場環境を踏まえた検討の結果、引続き市場価格の時価とみなせない状態にあると判断し、当中間期末においては、合理的に算定された価額をもって中間貸借対照表計上額としております。これにより、市場価格をもって中間貸借対照表計上額とした場合に比べ、「有価証券」は1,485百万円増加、「繰延税金資産」は601百万円減少、「その他有価証券評価差額金」は884百万円増加しております。

変動利付国債の合理的に算定された価額は、当社が保有する15年変動利付国債について、日本証券業協会公表の店頭売買参考統計値(10年、20年、30年の利付国債)及び10年のスワップションボラティリティのデータを使用し、フォワードレートプライシングモデルにより算定しております。

## 3. 時価評価されていない主な有価証券の内容及び中間貸借対照表計上額（平成21年9月30日現在）

内 容	金額（百万円）
満期保有目的の債券 非上場社債	—
子会社・子法人等株式及び 関連法人等株式	11
子会社・子法人等株式 関連法人等株式	1
その他有価証券	793
非上場株式	8,168
非上場社債	

(注) 当中間期において、時価のない株式について1百万円減損処理を行っております。

時価のない有価証券の減損処理基準は以下のとおりであります。

- (1) 実質価額が50%以上下落した銘柄は、全て減損
- (2) 破綻懸念先、実質破綻先及び破綻先銘柄は、全て減損

(税効果会計関係)

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳は、それぞれ以下のとおりであります。

繰延税金資産	
貸倒引当金損金算入限度超過額	4,695 百万円
減価償却費損金算入限度超過額	342
株式等有税償却額	345
未収貸付金利息税務計上額	155
その他	468
繰延税金資産小計	6,008
評価性引当額	△1,705
繰延税金資産合計	4,302
繰延税金負債	
固定資産圧縮積立額	127
その他有価証券評価差額金	537
その他	241
繰延税金負債合計	906
繰延税金資産の純額	3,395 百万円